

アラスカ便り



第4回

アラスカといえば、「雄大な自然」をイメージする人が多いのではないだろうか。実際、私もそうであったし、数ヶ月滞在した現在でもそれは変わらない。私の滞在しているフェアバンクスはアラスカ州で2番目に大きい街であるが、人口は3万人程度、周辺地域を含めても10万人に満たないくらいであり、人口規模だけでいえば熊谷市の約半分である。市内でも大通りを少し外ればタイガの森が広がり、さながら高原の別荘地のような趣である。IARC/UAF (International Arctic Research Center/University of Alaska Fairbanks) の建つ丘から南遠方に見えるアラスカ山脈やデナリ (マッキンレー) 山の風景は壮大だ。夜中にしばしば見ることのできるオーロラは、なんとも幻想的で美しい。

しかし最近、朝はどうも清々しくない日が多い。なぜかといえば、空気が排気ガスくさいのだ。でもその理由はすぐにわかる。フェアバンクスは晴天率が非常に高い地域であり、ここ1ヶ月でみても雪が降った4、5日を除いてはほとんど快晴である。また風が強くなることもほとんどない。これに加えて夜が長いとなると、朝方には強い接地逆転層が成長している。工場の煙突からの煙を見れば、地上付近の空気が非常に安定していることがよくわかる (写真1)。さらに、朝は車通りも多く、暖炉からなのか家々の煙突からも煙が出ている。大気が安定しているので、これらからの排気ガスが拡散されにくいのであろう。こんな時は、大自然を感じつつも深呼吸をする気にはなれない。

もう一つ、私の深呼吸を妨げる要因は、何と言っても寒さである。11月中旬になり、寒さのレベルがまた一段階上がった気がする。ここ2週間は、日平均気温で -30°C くらい、日中でも -20°C 台という日が続いている (写真2)。外に出る時は、帽子・マフラー・手袋は手放せなくなった。露出している頬や鼻先は、外に出て数分もすると痛みを感じる。IARC 近くの木々には樹氷が成長していた (写真3)。こんな中で深呼吸でもしようものなら大変である。

2016年12月14日

渡来 靖 (環境システム学科)



写真1： 工場の煙突からの煙は、大気が安定していることを物語る

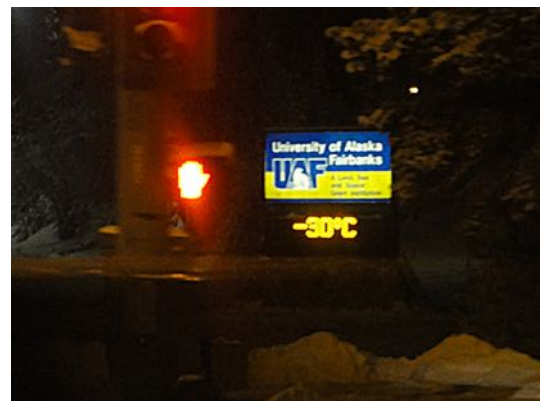


写真2： UAFの入り口にある電光掲示板には、「 -30°C 」の文字が。12/13の17:30頃撮影



写真3： IARC (奥) 近くの駐車場脇の木にも樹氷が付いていた